荻野吟子と聖書

鈴木範久（すずき のりひさ）　立教大学教授

日本の近代化のため、さまざまな分野において、キリスト教が刺激を与え、先駆けとなった事実はよく知られている。それは女性による医療活動の面でもいえる。日本最初の女性医師と最初の看護婦は、荻野吟子と大関和子の二人によって切り開かれた。吟子は一八五一年（嘉永四年）、武蔵国俵瀬村（現在の埼玉県妻沼町俵瀬）に生まれた。荻野家は名主であり、吟子は子どものうちから学問を教えられ才能が注目されていた。しかし年頃には結婚、夫から性病を移されたうえ、精神的にも病んで離縁となった。

上京して治療を受けた病院で、男性医師による診察に恥辱を感じた吟子は、同じ病院で女性たちが、一様に「男の医者に毎日診察を受けることがどんなに辛いことか」と嘆く声を聞いた。他方、恥辱のため診察を受けず、病気を悪化させている患者も少なくなかった。これを知った彼女は、みずから医師になる決意を固めた。約二年間の治療を経て回復した吟子は、女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）で学んだ後、私塾好寿院で医学の勉強に打ち込む。ここでの三年間の学生生活は、男子学生の間に混じり、言うに言われぬ苦労があった。

ところが、吟子がせっかく医学を修めても、医師の受験資格は女性には与えられていなかった。卒業と共に東京府庁に提出した願書は却下された。再度の出願も却下された。だが、彼女はめげなかった。翌年、内務省衛生局長・長与専斎に直接会い、切々と真情を訴えた結果、ようやく医術開業試験の願書が受理された。こうして一八八四年九月の前期試験に合格、続いて翌年三月に行われた後期試験では合格者二十四人中ただ一人の女性となった。ついに日本における女性医師第一号が誕生したのであった。年齢は三十四歳に達していた。ちなみに次年に行われた試験では、女性医師第二号として生沢クノが合格する。クノもまた埼玉県の出身でカトリック信者となる。医師の資格を得た吟子は、さっそく本郷湯島に荻野医院を開業した。女性の患者をはじめ女性医師を目指す学生たちも同居して医院はにぎわった。

吟子のキリスト教との関係につき、彼女に洗礼を授けることになる海老名弾正は、一八八四年十月、京橋の新富座で開催された基督教大説教会を挙げている。二日間にわたって開催され、海老名弾正、小崎弘道、フルベッキらの演説があった。彼女が医師の前期試験に受験した直後である。これまで女性差別の問題に苦しんできた吟子であるだけに、平等と愛を説くキリスト教の人間観には多大の共鳴を覚えたに違いない。吟子は、一八八七（明治二〇）年六月、湯島にあった本郷教会で海老名から受洗する。海老名は吟子が使用していた聖書につき、「聖書の文字が細かくて視力に悪影響を与えることを恐れ、自分で手写した大部の聖書であった」と述べている。

そのころ、広く日本社会の弊風の矯正を目指して、日本キリスト教婦人矯風会が、一八八六（明治十九）年十二月六日に結成された。初代会頭には矢島楫子が就任、吟子は同会の風俗部で活躍、同部長、副会頭に就く。明治女学校の校医にもなる。

やがて吟子の前に彼女の運命を一変させる男性が登場する。熊本出身の同志社学生志方之善（ゆきよし）である。新島襄から洗礼を受け「非常な理想家で、熱烈な感情家でもあった」と海老名は見ている。その志方から求愛を受けたのである。志方と吟子とは年齢が十三歳も開いていた。もちろん吟子が年上であったから周辺はこぞって反対した。しかし二人は反対を押し切り、一八九〇（明治二十三）年十一月二十五日、結婚式を挙げた。

一八九一年十月二十八日、岐阜県と愛知県地方を中心に大規模な地震が発生した。濃尾大地震である。死者は八千人近くに及んだから、地震による孤児や生活困窮による少女の誘拐や売買が横行した。当時、立教女学院で教育に従事していた石井亮一は、現地に出向く一方、身寄りを亡くした少女二十四人を引き取った。その少女たちを、最初に預けたところが、当時、西黒門町にあった志方と吟子の家でもある医院であった。吟子はキリスト教婦人矯風会の風俗部長として廃娼運動を行っていた立場から、喜んで協力したに違いない。石井はその後、日本最初の知的障害児の教育施設・滝乃川学園を開設する。

同じころ志方は、北海道の利別原野を開拓し、そこにキリスト教の理想郷建設の夢を抱き、一八九一（明治二十四）年、同志と北海道に渡った。開拓地をインマヌエル（神とともにいます）と名付けた。しばらくして吟子も医院を畳み夫の後を追って入植した。

現地では吟子自身も、聴診器を鍬にかえて開墾の仕事に従ったといわれるが、開拓地の苦難はここでも例外でなかった。計画は頓挫、早くも一八九六年に二人は現地を去り、一八九八年には瀬棚に移り、荻野医院を開業した。同所では淑徳婦人会を作り、会長としてキリスト教婦人矯風会に似た活動をしている。しかし、同地で伝道していた夫の之善は、一九〇五（明治三十八）年死去。吟子は、しばらく医業を続けていたが、一九〇八年東京に戻る。帰京後、下谷新小梅町に医院を開いたものの、もはや往年ほどの注目を浴びることなく、一九一三（大正二）年六月二十三日、ひっそりと世を去った。

吟子が生涯を通じて愛用した聖句は「人その友のためにおのれの命をすつるはこれより大なる愛はなし」（ヨハネ一五・一三）であった。この言葉は、埼玉県俵瀬と北海道瀬棚の双方に建てられた彼女の顕彰碑に共に刻まれている。今日、瀬棚町に設けられた郷土館には、彼女の愛用した英文の『聖書物語』（The Bible and its Story）が遺されている。

日本最初の公許女医　荻野吟子／明治18年35歳
（写真提供：瀬棚町郷土館）